

発明文化論

〈第 62 回〉

丸山 亮

技術進歩と人間性

ロンドン・オリンピックの陸上競技で、南アフリカのオスカー・ピストリウス選手が両足に義足をつけて走った姿は、今も多くの人の眼に焼き付いているだろう。北京パラリンピックで結果を残したからロンドンの活躍もある程度予測できたが、健常者とともに走っても、準決勝まで進んだのだ。もっともここに至る道は平坦でなかった。国際陸上競技連盟が先の北京オリンピックで義足による推進力は規定に違反するとして出場を認めなかったのに対し、彼はスポーツ仲裁裁判所に訴えてこの決定を覆さなければならなかった。ロンドン・オリンピックでも、400メートルの世界記録保持者マイケル・ジョンソンは、義足によって有利になっていないかと疑問を投げかけている。

ピトリウスは先天性の障害により腓骨がない状態で生まれ、生後 11 ヶ月のとき両足の膝から下を切断するほかなかった。その後成長するにつれ、ラグビー、水球、テニス、レスリングなどに親しんだというから、もともと運動能力は高かったのだろう。

義肢は炭素繊維製の競技用で、J字型をした形状から見てもよほど弾力があるように思われる。これは量産品でなく、使用者の個性に合わせてアイスランドのメーカーが一点一点、手作りしたものという。優れた技術によって拡張された身体は、人間本来のものともみればどうかの議論を呼びこととなった。

東京オペラシティ内の NTT インターコミュニケーション・センター (ICC) で開かれている「アノニマス・ライフ 名を明かさなない生命」展には面白い出品がある。「米朝アンドロイド」と題されたロボットで、落語家の桂米朝に似た人形が高座に上がって落語を演じている。隣には米朝を模した人間による落語の映像と音声が流れているが、ロボットの人形は表情といい、しぐさといい、そっくりに動いているのがわかる。作り物と思って見ているうちに、なんだか目前の人形が本物のような気がしてくるのだ。

似たような経験は文楽を見ているときもある。三人使いの人形が舞台上で動くとき、最初は人形を使う生身の人間が視野に入って感情移入を妨げるのだが、やがてドラマの進行とともに使い手は意識の外に置かれ、人形だけに向き合っている気になる。米朝アンドロイドでもまた、人形と対峙していることを忘れる時間がやってくる。アノニマス・ライフ展は、身体にかかわる技術進歩によって、人間の「生」のあり方が揺らいでいることを見せようとしている。

身体性を語る以前に、近代人の特性とされた個性は、ずっと揺らいでいた。現代美術の世界では、その個性の刻印であるオリジナル信仰を笑いの対象とすることが普通の表現にまでなっていた。パロディーはそこに根を下ろすものだ。美術家の森村泰昌はレンブラントやマネの絵画中に自身が入り込んだ作品を発表し、さらにそれを他者に描かせることによって二重にアイデンティティーを揺さぶっている。もっともそこには森村の名前が密着しているわけで、越境の行為までを否定しているのではない。

近頃電車の中で新聞を読んでいる姿がめっきり減った。たいていの人はスマートフォンなどの携帯端末をにらんでいる。路上を歩きながら画面に見入っている人も少なくない。もはやこれらの機器は身体の一部と化したとみていい。脳の記憶や判断などは、こうして拡張された身体機能にとって代わられたのだ。

これから再生医療が iPS 細胞の実用化により飛躍的に進むと期待されている。生殖細胞は特権的な意味を持たなくなり、普通の細胞が身体部位の欠損を補ったり、既存のものと置き換わる。そうした時代が目の前まで来ている。技術進歩は今日、私たちに本来の人間とは何かを根本から問いかけているともいえよう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)